

ヴェラール版『変身物語』 *La Bible des poètes* 研究

保井 亜弓

はじめに

活版印刷術を、火薬、羅針盤と並べて三大発明にあげたのはフランシス・ベーコン Francis Bacon であった。それは単なる書物の制作における新しい技術を超えて、大きなメディア革命であったと考えられている。とはいえ、新技術によって、書物の制作は写本から印刷本へとすぐさま転換したのではなく、その過渡期において両者は長く共存していたことも広く認識されている。

印刷本は、それまでの書物、すなわち写本の形態を手本として誕生したのであり、一方写本もまた、活版印刷術に先んじて起こった木版画や銅版画を含めた「印刷により生み出されたもの」をすぐさま取り込み始める¹⁾。そのためこの共存の時代には、写本、印刷本、版画のさまざまな要素が混在したハイブリッド形式の書物が現れることになった。写本の支持体であるヴェラム（羊皮紙）はまた、印刷本にも用いられた。同一書物で、ヴェラムと紙で刷られた二つの版があるものは、ダブル・エディションと呼ばれる。たとえばゲーテンベルクの42行聖書(1455年)では、現存する47部のうちヴェラム刷り21部(完本4部)、紙刷り26部(完本17部)が現存している。イニシアル装飾以外の挿絵は含まないものの、それぞれに異なった彩飾が施されており、写本と見紛うごとく仕上げられている。こうした疑似写本ともいえる印刷本は、中世以来の写本の伝統を残している。というよりも、むしろ積極的にそれを取り入れているのである。本稿では、多くの豪華なヴェラム刷りを手がけたことで知られる、パリの印刷者アントワヌ・ヴェラール Antoine Vérard (~1513年頃)が、1493/4年に出版した『変身物語』 *La Bible*

des poètes のヴェラム（羊皮紙）刷り〔図3～8〕を取り上げ、できる限り書物全体を把握しつつ、その挿絵装飾の特徴を明かにすることを目的とする。

1. ヴェラールとマンシオン

アントワヌ・ヴェラールの名は、1485年9月12日の日付がある『ローマ時禱書』 *Horae ad usum Romanum* の奥付に初めてあらわれ、それ以前の記録はないが、この時点ですでに独立して書籍業を営んでいた²⁾。ヴェラールの名あるいは商標を冠した出版は280点以上にも及び、1508年にはルイ12世 Luis XII より出版者として初めての出版允許を受け、さらにフランス王シャルル8世 Charles VIII、ルイ12世、イングランド王ヘンリー7世 Henry VII をはじめとする王侯等がパトロンであった事実から、彼が出版者として大きな成功をおさめたことが理解される。その成功の理由は、ヴェラールが幅広い出版を手がけた出版者であったのみならず、テキストと、イメージを含む装飾の双方において大きく係わった点にある。すなわち、当時の印刷者としては珍しく特定のパトロンへの献呈文等を自ら記し、また「言葉よりも画像の方がより一層熱烈な欲望をかきたてるのです」³⁾という彼の言葉にあらわれているように、ヴィジュアルな効果を重視した、芸術的価値の高いヴェラム刷り豪華本を積極的に制作して、富裕な顧客に供したのである。ルネサンス的な人文主義とは逆の嗜好をもつヴェラールは、まさに「アート・エディター」として、中世の伝統に則りながら、「読む書物」ではなく、「見るための書物」つまり「芸術としての書物」を世に送り出したのだ⁴⁾。

ヴェラールの『変身物語』 *La Bible des poètes* を論じるにあたっては、もうひとり別の出版者、ブリュージュのコラルト・マンシオン Colard Mansion (1440年以前～1484年5月以降)にも触れておかねばならない。なぜなら、オウイディウス『変身物語』の初めての木版挿絵付き印刷本は、マンシオンによって1484年に出版された『変身物語』 *Ovide moralisé* [図1] であり、ヴェラール版は、テキストと木版挿絵ともにマンシオン版を受け継いだ、事実上はその第2版ともいえる性格をもつからである。

写字生として多くの写本制作にかかわったマンシオンは、翻訳者でもあり、さらにさまざま新たな試みを行った初期の出版者のひとりであった⁵。年記のある最初の出版、1476年のボッカッチョの『名士、名婦列伝』 *De la ruine des nobles hommes et femmes* に、エングレーヴィングによる挿絵を加えるという新たな試みを行い⁶、ウィリアム・カクストン William Caxton と仕事をしたことで知られ、また活版印刷に入念な彩飾を施したその豪華本はヴェラールの手本となったと考えられる⁷。『変身物語』 *Ovide moralisé* には33点という多くの木版挿絵が付されており、その図像はマンシオンのパトロンであったロードウェイク・ヴァン・フルートフース Lodewijk van Gruuthuse⁸ が所有していたオウイディウス写本 (BN Ms. fr. français 137) に従っている⁹。この第26番目の書籍はマンシオンが手がけた最後の出版であり、その後彼は負債のために店も手放すことになる。ヴェラールの成功とは対照的な顛末である¹⁰。

マンシオンの『変身物語』 *Ovide moralisé* も、木版画彩色や欄外彩飾を施したものが現存しているが¹¹、ヴェラールは、マンシオン版を手本として木版挿絵を制作させたばかりでなく、ダブル・エディションとした。とくにヴェラム刷りは、木版画に加えた入念な彩色と200点以上もの挿絵¹²の挿入によって、きわめて豪華に仕立てられている。ヴェラール版は、そのネーミングのよさもあって、ルネサンスを通じて広く流布した¹³。1493/4年の初版以降、年記のな

いヴァージョンが2版(1498?¹⁴、1507?¹⁵)出され、さらにその後フィリップ・ド・ノワール Phillip de Noirにより2度版が重ねられた(1523、1531)¹⁶。

2. 『変身物語』 *La Bible des poètes* の概要

1493/94年の初版『変身物語』 *La Bible des poètes* は、すでに述べたようにダブル・エディションとなっており、現存する9部のうち4部がヴェラム刷りである¹⁷。初版の構成は、まず題字のフォリオ、そして木版大扉絵から始まる序文、神々をあらわす木版小挿絵が付されたテキストと続き、目次をはさんで本文に入ると、各巻頭に木版大扉絵、最後に印刷者商標がある。フォリオ番号は本文が始まることから印刷されている¹⁸。木版大扉絵は白地の紋章のある枠装飾を伴っているが、これは写本の欄外装飾に相当するものである。テキストページは46、47行の2コラムで、各巻頭は木版大扉絵の下に6、7行を配するレイアウトとなっている。活版印刷には不要であるはずの罫線がひかれ、写本の体裁を整えている。ヴェラム刷りでは、木版画に彩色が加えられるのと同時に、各巻文中において、あらかじめ挿絵のために上下に空間をとって印刷された見出し部分に小挿絵が描き加えられている。この見出しは、目次に記されているものにはほぼ一致しており、木版画と同様マンシオン版にすでにあつたものである¹⁹。

ヴェラム刷りの中で、最多243点の挿絵(うち彩色木版画大17点、小15点)を含み、またもっとも質の高いものが、シャルル8世への献呈文と、フランスの紋章があるパリ国立図書館本 (Vélins 559 以下BN 559と記す) [図4] である。このBN 559を基にして、その構成および挿絵図像を、大英図書館本 (IC41148) [図3]、パリ国立図書館所蔵の別のヴェラム刷り (Vélins 560 以下BN 560と記す) [図5] と比較してまとめたのが [表1] である²⁰。

大英図書館本では、冒頭の大扉絵下から始まる、フランス王の名が記された献呈文のフォリオが省かれ、そのかわりに、サトゥルヌスを去勢するユピテルをオリュンポスの神々とともに描く大扉絵は、木

版の構図を模して全ページ大で、すなわち下部のテキスト分だけ縦に引き延ばされた画面に手描きで描かれている²¹。この挿絵および彩色大扉絵には、イングランドの紋章が描かれており、ヘンリー7世のために制作されたと考えられる。BN560は、現在はフォリオを欠いているものの、もともとはBN559と同様に多くの挿絵を含んでいたと考えられ、アングレーム伯シャルル Charles d'Angoulême の1496年の死後直後の財産目録から、その所蔵本と同定される。

BN559の彩色大扉絵および小挿絵はヴェラルの下で活躍した画家の中でもっとも優れたジャック・ド・ブザンソンの画家 Master of Jacques de Besançon の手に帰される²²。この画家は、大図書館本では木版画彩色は行っていないものの、ほとんどの小挿絵を描き、またBN560の9点の彩色大扉絵を手がけている。

3. BN559の構成

BN559では、32点の木版画の大扉絵および小挿絵に入念な彩色が施され、そこに加えてさらに211点もの挿絵が挿入されている。表1でわかるように、大英図書館本とBN560においても、数は及ばないものの同様に多くの挿絵が描かれている。こうしたきわめて多くの挿絵を含む書物の制作が可能であったのは、やはり活版印刷という大量生産の新技术によるものだろう。特注のヴェラム刷りであっても、同様の規模の写本を制作するよりはずっと手間がかからなかったはずである。

興味深いことに、最も豪華なBN559に他では描かれている挿絵がない場合がある。たとえばフォリオ LXIIIr は、BN560では女神ラトナと2人の男、大英図書館本では女神のかわりに祭壇が見出しに対応して描かれているのに対して、BN559では見出しも印刷されていない。印刷されているはずの見出しがない箇所はいずれの刊本においても認められ (fol. LXVv, CLXVIIIr)、印刷工程という点でも興味深い。また、「ケユクスを発見するアルキュオネ」の

挿絵は大英図書館本にのみみられる (fol.CXXXIr)。さらに、BN560のフォリオでは、元来見出しのない空白部分にも挿絵が描かれている (fol.CLXIIIv)。通常は印刷された見出しが挿絵で覆われると、その文章が欄外に手書きで記されるが、この箇所だけにそうした書き込みが見られない。図像表現は近似するものがある一方で、大英図書館本に欠けている場面は、B560においてもまたB559とは異なるという傾向がある。ヴェラルは全体にわたる指示を行ったであろうが、こうした事実は、工房において画家の裁量にある程度まかされていたことを示すものと考えられる。

次に挿絵の主題を概観する²³。まず本文の前に、神々についての記述があるが、これはマンシオン版と関連するオウィディウス写本 (BN Ms. fr. 137) にはない。ここでは物語のキャラクター紹介のごとく主要な神々がイメージとテキストで示されている。次に本文テキストは、オウィディウスの原典の翻訳ではなく、『教訓化されたオウィディウス』 *Ovide moralisé* であるため、原典にはない多くの場面があることに気づく。挿絵の図像伝統を明らかにするには、先行する写本との比較研究が必要であるが、本稿では〔表1〕によって全体像を示すのみに留める。原典にはないテキストの主な挿絵をあげると、第1巻では、冒頭にまずキリスト教的な天地創造が加えられ、アダムとエヴァの場面 (fol.IIv, IIIr) が描かれる。サトルヌスとガイアとその子どもたちを描く第3番目の挿絵 (fol.IIIv) から、神の系譜と人間の新生を語るオウィディウスのテキストが始まる。第4巻では、「アタマス王の妻イノ」の物語の箇所に、継子である「プリクスとヘレ」にかんする物語 (fol.XLIv, XLIIr, XLIIv)、第9巻では、「テバイ攻め」にかんする物語 (fol.Cv, CIr, CIv, CIIr)、第11巻では、「テティスとペレウス」の物語に続いて、「パリスの審判」 (fol.CXXIIIv, CXXIIIr., CXXIIIv., CXXVr, CXXVv, CXXVr) が見られる。その他にも中世においてペルセウスと同一視された「ベッレロポン」 (fol.XLVIIIr) といった関連する物語が挿入されている。

挿絵が描かれる箇所には、見出しの行数にもよるが、上下が数行空けられているのに対して、1、2行しか空いていない見出しもある。横長の小さな画面もあるものの、この場合は明らかに挿絵を描く空間は用意されていない。つまり、ヴェラールは、見出しを選択して挿絵を挿入する場所を決定したと考えられるのである。1箇所だけ例外的なレイアウトになっているのがフォリオ CXLIX^v であり、ここでは右の1コラム全体が空欄となり、目次にはない見出しが印刷され、BN559、BN560、大英図書館本のいずれにも挿絵はない。

見出しは、画家にとっての指示となっているとも考えられるが、このように挿絵やイニシアルの指示があらかじめ空けられた空間に書き込まれることは、中世の写本制作では常であった。ヴェラール版では、挿絵が描かれない場合は、印刷された見出しはそのままそれ自体として機能している。実際、オックスフォードのボードリアン図書館所蔵の紙刷り (Douce 271) を参照すると、罫線は引かれているが、木版画の彩色や挿絵は一切ない。それは明らかにヴェラム刷りほどに凝った豪華本として仕立てられてはいないものの、装飾的な要素が全くないわけではない。というのは、ヴェラール独特のカリグラフィで書かれたイニシアルのある題字が金泥で美しく飾られているからである。ヴェラム刷りの題字には、こうした装飾がみられない。紙刷りでは、ヴェラム刷りとは別の方法で加飾が行われているのである。木版画もテキストページも色彩がなくとも十分に美本なのであり、とりわけ初版は、後版とは異なったかたちで仕立てられていることがわかる。

4. 彩飾の特徴

それぞれにおいて木版画彩色や彩飾はどのように異なるのか。具体的に例を見ながらその特徴を確認したい。はじめにとりあげるのは第4巻の大扉絵である (fol. XXXV^v)。木版画の構図を確認するために、まずボードリアン本の紙刷りを見ていく〔図2〕。ここには、ミニュアスの娘たちが語る最初の



図1 第4巻扉絵『変身物語』コラルト・マンシオン刊
ブリュージュ 1484年 ©The British Library Board. (IC49428)
fol.113recto

物語「ピュラモスとティスベ」が描かれている。その恋を親に反対されたふたりは、ある晩駆け落ちを企てる。待ち合わせ場所に最初に到着したティスベは、雌ライオンに出くわし、洞窟に隠れるのだが、その時ヴェールを落としてしまう。獲物をとらえたばかりのライオンは血塗られたその口でヴェールを引き裂いた。そこへピュラモスが遅れてやってきて、ヴェールを見てティスベが死んだと思い、嘆きのあまりに自殺してしまう。戻ってきたティスベはピュラモスの遺体を発見し、自らも命を絶つ。

マンシオン版〔図1〕と比較すると、人物の配置や構成要素にいたるまで構図は非常に似ている。ヴェラール版のすべての木版画は、ほとんどがマンシオン版を直接手本としていることが明らかであるが²⁴、画像はしばしば左右反転している。ここでは向きも同じである。前景には、泉のそばに立つ桑の木の下でピュラモスを発見し、彼の剣で命を絶つティスベが大きく配され、後景のライオンと隠れるティスベも一致する。さらにヴェラール版は、ティ



図2 第4巻扉絵 『変身物語』アントワーン・ヴェラルル刊
パリ 1493/94年 Bodleian Library, University of Oxford.
(Douce 271), fol.XXXverso



図3 第4巻扉絵 『変身物語』アントワーン・ヴェラルル刊
パリ 1493/94年 ©The British Library Board.
(IC411148), fol.XXXverso



図4 第4巻扉絵 『変身物語』アントワーン・ヴェラルル刊
パリ 1493/94年 BnF. (Rès. Vélins-559), fol.XXXverso



図5 第4巻扉絵 『変身物語』アントワーン・ヴェラルル刊
パリ 1493/94年 BnF. (Rès. Vélins-560), fol.XXXverso



図6 「壁の穴から会話するピュラモスとティスベ」 『変身物語』
アントワーン・ヴェアール刊 パリ 1493/94年
BnF. (Rés. Vélins-559), fol. XXXV verso



図7 「壁の穴から会話するピュラモスとティスベ」 『変身物語』
アントワーン・ヴェアール刊 パリ 1493/94年
BnF. (Rés. Vélins-560), fol. XXXV verso



図8 「アポロンを訪れるパエトン」 『変身物語』
アントワーン・ヴェアール刊 パリ 1493/94年
BnF. (Rés. Vélins-560), fol. XI verso



図9 「ネロ皇帝がヴェスパジヤヌスに使命を与える」
この版木は、ヨセフス『ユダヤ戦記』(1492)で最初に刷
られ、後に多用された (Mary Beth Winn, *Anthoine Vêrad
Parisian Publisher, 1485-1512 Prologues, Poems and
Presentations*, Genève, 1997より)

スベと反対側にピュラモスを描き加え、ライオンがヴェールをくわえることで、「ライオンを恐れて隠れるティスベ」と「ヴェールを発見するピュラモス」の2場面を巧みに表現している。大扉絵では、物語の経過が異時同図であらわされることが多いが、ここではマンシオン版のそれをさらに複雑にしているのである。また、マンシオン版では、前景のティスベはピュラモスに寄り添い、ふたりは一体化しているが、ヴェラル版では、個々の人物はより独立して明瞭に描かれていることも特徴的である。

ヴェラム刷りの同画面をみると、彩色によってがらりと印象が変わることがわかる。BN559、560では、いずれも金銀のハイライトを多用した入念な彩色が施されている〔図4、5〕。ボードリアン本〔図2〕と比較すると、木版画の線にかなり忠実に描かれていることがわかるが、画面だけを見ている限りでは、下に木版画があるとは想像できないほどの出来栄である。背景の町を塗りつぶして消している点も両者に共通している。ただし、髪型や衣の色は違っており、異なった雰囲気を出している。一方大英図書館本では、同様にハイライトに金銀が用いられて鮮やかに彩色されているものの、全体に薄塗りで、地表部分などではうっすらと木版画の線もみえる〔図3〕。ジャック・ド・ブザンソンの画家による彩色とは明らかに異なっている。とくに木や草花の表現は木版画の線によらず、かなり大雑把に描かれている。血を浴びて色を変えた桑の実の表現は、それぞれ異なっており興味深い。

大扉絵には枠装飾が付され、ページ全体が華やかに彩られている。枠装飾の版木は、実はすべてに同じパターンが使用されている。このフォリオは、ボードリアン本と比較すると明らかなように、BN559と大英図書館本ではその彩色は木版画を活かしたものとなっている。モチーフを残しながら細部を変化させてヴァリエーションを出すという手法はかなり経済的だっただろう。一方BN560の彩色は、木版枠装飾と全く異り凝ったものとなっている。このタイプの装飾はBN559、大英図書館本の中にも見られる。このように彩飾法に変化があることは、主な

挿絵と装飾を分業して手がける、中世以来の制作方法が行われていた可能性を示唆するものと考えられる。

次に本文の小挿絵に目を転じると、「ピュラモスとティスベ」の物語には、「壁の穴から会話するピュラモスとティスベ」(fol.XXXVIv)、「ライオンから逃げるティスベ」、「ピュラモスの自殺」(fol.XXXVIIv)の3場面が描かれている。BN559と大英図書館本の挿絵は、いずれもジャック・ド・ブザンソンの画家の手になるが、同じ場面を描きつつも、構図を繰り返すことなく、ヴァリエーションを与えて表現している。BN560の画家は概してジャック・ド・ブザンソンの画家には及ばず、人物表現も単調であるが、たとえばピュラモスとティスベを隔てる壁の捉え方は全く異なっている〔図6、図7〕。このように個性が出ている場面がある一方、全体を通じて類似した構図も多くみられることは工房制作における手本の問題が考えられるだろう。また、大英図書館本では第13巻以降は明らかに挿絵の手は異なり質が落ちる²⁵。主要な画家がどの程度関与するかで仕上がりは異なってくる。そこには当然ながらヴェラルも関与していると推測できる。

最後に、第2巻の大扉絵をとりあげる (fol.XIv)。物語は、第1巻末で、アポロンの息子であるパエトンが、母クリュメネに父のことを訪ねるところから続いており、大扉絵にはアポロンの神殿を訪ねるパエトンが描かれる。BN559の彩色大扉絵は下の木版画とは全く異なった画面となっており〔図8、9〕、BN560でもほぼ同じ図が描かれている。薄塗りの大英図書館本では、木版画の図のままで描かれている。実はこの木版画は、1492年に刊行されたフラヴィウス・ヨセフスの『ユダヤ戦記』に付された3枚の木版画のひとつである「皇帝ネロがヴェスパシアヌスに使命を与える」なのである。この版木は、その後皇帝冠が王冠に変えられ、鷲の紋章も削除されて、別の出版において何度か使用された²⁶。したがって、当然ながらオウィディウスの物語の要素は含まれていない。一方BN559の彩色大扉絵では、アポロンの神殿の様子がオウィディウスの記述どおりに描か

れている。燦然と輝く玉座につくアポロン。花を手にする「春」、裸の青年の「夏」、葡萄の首飾りをつけ、手に葡萄を持つ「秋」、老人の「冬」は、それぞれ頭上にその名が記されている。背景の左右には、メダイオンに月歴図が、建築の浮き彫りを示すかのよう金にハイライトを施したグリザイユで描かれている。使い回しの木版画は豪華献呈本にはふさわしくなかったのだろう。画家の判断でこのような大きな変更を行ったとは考え難く、また、おそらくヴェラール自身の指示なしにはこれほど記述に即した描くことができなかつたのではないだろうか。まさに「アート・エディター」としてのヴェラールの存在が確認できる場面だといえる。

おわりに

書物の芸術を研究対象とするとき、その総体を把握する必然性を感じながらも、それを行うのは大変困難な場合が多い。近年のファクシミリの普及は、写本研究を大いに発展させているが、印刷本はその複数性によってかえって複雑な状況であるともいえる。総体を把握するには、一冊の書物のみならず、複数の刷りを検討しなければならない。本稿は、限られた資料と調査による研究の報告であるが、世に知られたヴェラールのヴェラム刷りがどのように制作されたのかを明らかにする、ひとつの手がかりになると考えている。ヴェラールは中世の伝統を引き継ぎ、写本と比肩する印刷本を生み出したが、一方でそれが印刷という新たな技術に支えられていることを改めて認識させられる。すぐれた画家によって入念に彩色された木版画は、限りなく絵画に近いものの、下絵としての役割をむしろ強く果たしているともいえる。その存在はかき消されてしまうのに、かえってその機能の重要性が際立っているように感じられるのである。繰り返されるイメージの同一性と差異。版画研究という立場からも、ヴェラールのヴェラム刷りはきわめて興味深い対象であるといえる。

注

- Hindman, Sandra and Farquhar, James Douglas, *Pen to Press: Illustrated Manuscripts and Printed Books in the First Century of Printing*, Maryland, 1977.
- アントワース・ヴェラールについては、その出版目録を含むマクファーレンの基礎文献、およびマクファーレンのリストを補完し、ヴェラール自身のテキストを詳細に検討したウインによる近年の研究がある。Macfarlane, John, *Antoine Vérard*, London, 1900 (rpt. Geneva, 1971) ; Winn, Mary Beth, *Antoine Vérard Parisian Publisher, 1485-1512 Prologues, Poems and Presentations*, Genève, 1997.
- 'signes font esmouvoir/ Desirs ferventz plus que dictz mouvoir' 1503-08年頃の写本『キリスト受難』*La passion Jhesuscrist* (BN Ms. fr. 1686) におけるヴェラールによる序文。なお、この写本は詩と挿絵で構成されているが、挿絵としてイスラエル・ファン・メッケネム Israel van Meckenem によるエングレーヴィングの「受難伝」が刷り込まれている。Winn, *ibid.* pp.404-409, no.18.
- Winn, *ibid.* p.102.
- コラルト・マンシオンについては、次の文献を参照のこと。Saeger, P., 'Colard Mansion and the revolution the printed books', *the Library Quarterly* 45, 1975, pp.405-18.
- Kern, Thomas/ Mckendrick, Scot, *Illuminating the Renaissance*, cat. Exh., the Paul Getty Museum, 2003, pp.271-274, no.72. また、活版印刷はとの組み合わせではないが、ヴェラールもメッケネムの原版を所有して挿絵とした。注3参照。
- Boetius*, 1477.
- ロードウエイク・ヴァン・フルトフース(c.1422-1492)は、フィリップ善良公の廷臣、蔵書家、金羊毛騎士団員。ルイ・ド・ブリュージュとも呼ばれる。マンシオンの出版の1/3は彼の蔵書のテキストに一致する。
- 以下のウェブサイトでサムネイルながら全挿絵を見ることができる。http://collecties.meermann.nl/handschriften/showmanu?id=100005&page=0&page_size=40 (2009年10月30日現在)
- ヘントのアーレンド・ド・カイゼル Arend de Keyser は、マンシオンに倣って1485年に刊行したボエティウス本を豪華な挿絵入りとしたが、遺言書に「おそらくいつか売れるであろうはずのボエティウスがまだ100冊ある」と書き残した。出版者たちの試みは大きなリスクを伴っていたようだ。Hindman, Sandra, 'Cross-Fertilization: Experiments in Mixing the Media', in:

- Hindman/ Farquhar, op.cit., p.177.
- 11 木版画が彩色されているものや、欄外に装飾が施されているもの (Bruges, Openbare Biblioteek, 3877) がある。
- 12 いずれも通常はミニアチュールと表記して区別されないが、本稿では木版画に彩色されている場合は、彩色大扉絵と記す。
- 13 ヴェラルールがもつづくマンシオン版のフランス語テキストは、14世紀はじめの作者不詳のフランス語の *Ovide moralisé* およびピエール・ベルシュイール Pierre Bersuire によるラテン語の *Ovidius Moralisatus* として流布していたものの翻案である。ベルシュイール版テキストは、トレント公会議後の1564年に禁書とされた。
- 14 'SUR LE PONT NOSTRE DAME' の記載あり。住所はヴェラルールが1499年の火災まで住居兼店舗としていた場所。ウィンによれば、この版および1507版はヴェラルール死後の出版である。Macfarlane, op. cit., p.53, no. 104; Winn, op. cit., p.485.
- 15 'DEVANT LA RUE NEUFVE NOTRE DAME' の記載あり。大扉絵の木版は切断されて小さくなっている。住所は最終の転居地として確認されるものである。Macfarlane, ibid., p.77, no. 155; Winn, ibid.
- 16 1523年5月20日、および1531年5月29日の日付がある。いずれも出版者ヴェラルールの記載はない。1523年版はヴェラルールによる1507年版と同じ木版が用いられ、1531年版は1523年版にもつづく。Winn, ibid., pp.271 and 484.
- 17 Paris, BN Rès. Vélins 559, BN Rès. Vélins 560, Grenoble, Bm I57, and London, BL IC41148.
- 18 木版大扉絵のあるフォリオには番号が印刷されないもので、fol.IIから始まる。
- 19 マンシオン版ではむろん空間は空けられておらず、『変身物語』 *La Bible des poètes* の後版でも、挿絵のための空間はない。枠飾りも省かれた後版は、木版挿絵のみの廉価版となっている。本文に印刷される見出しは、目次に含まれないものもある。
- 20 グルノーブル本は、未見のため考察の対象とはしないが、ウィンによれば、彩色大扉絵14点および小挿絵12点と彩飾は少ない。Winn, op. cit., p.273.
- 21 Winn, ibid., p.281, fig.5.5a and 5.5b.
- 22 かつてジャック・ド・ブザンソン自身に帰された多数の作品が現在は変更され、この画家の同定は明確ではない。Winn, op. cit., p.66, note 27.
- 23 目次とほぼ一致する見出しによって物語を同定したが、見出しの内容との関連性が不明のものもある。
- 24 ただし、マンシオン版では本文の前に編者第二の序文があり、人間の黄金時代を描く木版大扉絵が付せられているため、木版画はヴェラルール版より1点多い。
- 25 ウィンは、ヴェラルールが巻頭をより重視する傾向を指摘している。Winn, op.cit., p.460.
- 26 *Catalogue of books printed in the fifteenth century*, VIII, the British Museum London, 1949, pp. 78, 81, 82 and 86.

(やすい・あゆみ 芸術学／西洋美術史)

(2009年10月30日受理)

〔表1〕『変身物語』 *La Bible des poètes* (1493/94) 構成対応表

本文は、BN559を基準とし、その構成および挿絵をBN560と大英図書館本と比較したものである。フォリオ番号は印刷に従いローマ数字で表記した。ただし、誤植箇所は訂正したものを記した。フォリオ番号が付されていない場合はアラビア数字で表記した。折丁の括弧内は印刷されたフォリオ番号の数字である。Wは木版画、大小を大文字、小文字で示す。木版画はすべて彩色されている。mは描かれた挿絵を示す。Sは見出し上下の空間を示す。神名等の長音は原則として省略した。

表で使用した記号は以下のとおりである。

- ・◎ 同一場面で構図がとくに類似しているもの
 - ・○ 同一場面を描いているもの
 - ・● BN560と大英図書館本で共通する表現がみられるもの (共通点を表記)
 - ・△ 構成要素あるいは構図に相違があるもの
 - ・× 異なる場面を描いているもの
- 相違は、人物等の位置反転、異なる場面設定のみ記した。

BN Rés.Vélins 559				BN Rés.Vélins 560	BL IC41148
折丁	folio	w/m	画像等	異同	異同
A 1-8	1r.		題字	フォリオ欠	題字
	1v.		白紙	フォリオ欠	○W1に似て手書き
	2r.	W1	扉絵 サトゥルヌスの去勢、ユピテル、ユノ、ネプテュヌス、プルート、ウェヌス (ニンフ?)	フォリオ欠	フォリオ欠
	2v.		序文	フォリオ欠	フォリオ欠
	3v.		テクスト始まり		
	4v.	w2	ユピテル	○	○
	5v.	w3	マルス	○	○
	6v.	w4	アポロン	○	○
B 9-16	8r.	w5	ウェヌス	○	○
	9r.	w6	メルクリウス	○	○
	10v.	w7	ディアナ	○	○
	11v.	w8	ミネルヴァ	○	○
	12v.	w9	ユノ	○	○
	13r.	w10	キューベレ	○	○
	14r.	w11	ネプテュヌス	○	○
	14v.	w12	パン	○	○
	15r.	w13	パッロス	○	○
	15v.	w14	プルート	○	○
C 17-24	17r.	w15	ウルカヌス	○	○w15に似て手書き テクスト手書き
	18r.	w16	ヘラクレス	○	○w16に似て手書き テクスト手書き
	19v.	w17	アスクレピオス	○	○
	20r.		目次		
a 25(1)-32	1r.	W18	第1巻扉絵 人間の誕生、善と悪との戦い、神をもつオウディウス	フォリオ欠	○
	1v.	m1	エヴァの創造	×	○
	11r.	m2	扉絵	○●(向かい合う)	○●
	11v.	m3	サトゥルヌスとガイアとその子たち	○	×
	111r.	m4	ユピテルによるサトゥルヌスの去勢	○△	○△
	111v.	m5	サトゥルヌスとセクス王	○△	○△室内
	11r.	m6	ティタン族に勝利するユピテル	○△	図欠 見出し
	11v.	m7	人間の料理を命じるリュカイオン王	○△●(室内)	○△●
	111r.	m8	神々を集めて語るユピテル	○	○
	111v.	m9	人間を滅ぼす大洪水をおこすユピテル	○△位置反転	○△
	1111r.	m10	人間を新生させるデウカリオンとペリュラ	○△	○△
	1111v.	m11	大蛇ピュトンを倒すアポロン	○	○位置反転
	11111v.	m12	ユピテルとイオ	×	図欠 見出し
b 33(1)-40	11111r.	m13	シュリンクスを追うパン	○	○
	11111v.	m14	アルグスの首を切るメルクリウス、ユノ	○△	○△
	111111v.	m15	母クリュメネにアポロンが父である話を乞うパエトン	×	×
	1111111v.	W19	第2巻扉絵 アポロンの鈴のバエトン、四季の擬人化	○	○△ 本巻に似る
	11111111r.	m16	アポロンの日輪の車を留むバエトン	○△	○△
	111111111v.	m17	バエトンに日輪の馬車の乗り方を教えるアポロン	×	図欠 見出し
	1111111111r.	m18	矢を射けるバエトン	○	○
	11111111111r.		目次にない見出し8小		
	111111111111r.	m19	バエトンの黒石の鈴のクリュメネ	○△	○△
	1111111111111v.	m20	ユピテルとアポロン	×	×
c 41(17)-48	11111111111111v.	m21	オケアヌスとティテスにユピテルの行いを語るユノ	○△	○△
	1111111111111111r.	m22	コロニスの変遷を証する白カラス	○	△室内

	XVIIc	m23	自カラスと小カラス	○●(地面)	○●
	XVIIc	m24	コロニスを殺すゾエプス	○●(屋外)	○の位置反転●
	XIXr	m25	サテュルヌスと羊身羊頭のキロン	○△	○△
	XIXr	m26	アスクレピオスに予言を尋ねて馬になるオキュロエ	x	図欠 見出し
	XXr	m27	メルクリウスの使者に羊(牛)を託うアポロン(?)	○△	○△
	XXr	m28	ヘルセに恋するメルクリウス	○△屋外	図欠 見出し
	XXr	m29	ミネルヴァと結婚の女神	○	○の位置反転
	XXIb	m30	ユピテルの命を受けるメルクリウス	○△	x
	XXIb	m31	アゲノル王とその娘たち	x	○△室内
	XXIb	m32	エウロパと牛に姿を変えたユピテル	○△	○
	XXIIIv	W20	第3巻扉絵 電(蛇)と戦うカドモス(後書)アポロンの神託を受けるカドモス、牛を発見するカドモス	○	フェリオ文
d	XXVc	m33	電(蛇)を倒すカドモス	○△●(位置反転)	○●
49(25)-56	XXVv	m34	カドモスが大地に墮いた大蛇の毒から兵士が生まれる	○△●(種神の方法)	○△●
	XXVIc	m35	カドモスと妻ハルモニアとその子たち	○●(位置反転)	○●
	XXVIIc	m36	アウタイオンに木笛を聞かれるディアナ	○△	x
	XXVIIc	m37	セメレと乳母に姿を変えたユノ	○屋外	x
	XXVIIc	m38	セメレを助けるユピテル	○△位置反転 屋外	○△
	XXIXr	m39	レイリオベに予言を告げるタイレシアス	○△	○△室内 位置反転
	XXIXr	m40	エコーの恋愛を拒否するナルキッソス	○△●(屋外、位置反転)	○●
	XXXr	m41	夢に降る自身の夢に恋するナルキッソス	○△	○△
	XXXr		目次がない見出し5小		
	XXXIv	m42	自らを打って死ぬナルキッソスと嘆くエコー	○△	○△
	XXXIb	m43	ペンテウスとタイレシアス	○△●(室内)	○△位置反転●
	XXXIb	m44	パッカスを迎えるテーバイの人々	x	○△
e	XXXIIIc	m45	ペンテウスと捉えられたアコイテス	○△位置反転	○△
57(33)-64	XXXIIIc	m46	母アガヴェと叔母に殺されるペンテウス	○△	○位置反転
	XXXVv	W21	第4巻扉絵 自殺するティスベ(後書)ライオンを恐れて隠れるティスベ、ヴェールを発見するピュラモス	○	○
	XXXVIv	m47	壁越しに話すピュラモスとティスベ	○△	○
	XXXVIIv	m48	ライオンに驚き逃げるティスベ	○△	○△
	XXXVIIv	m49	自殺するピュラモス	○△	○△
	XXXVIIv		目次がない見出し5小		
	XXXVIIIv	m50	ウルカヌスに捉えられたウェヌスとマルス	○△	○△
	XXXIXr	m51	赤筋きをするレウコトエを助ける、海に姿を変えたアポロン	○△	x
	XXXIXr	m52	レウコトエにネクタールをかけるアポロン	○△	図欠 見出し
	XLr	m53	妖精サルマキスに襲われる少年ヘルマズプロディトッス	○△	○△
f	XLIVc	m54	パッカスの怒りを受けるミニュアスの三人娘	○△	○△
65(41)-72	XLIVc	m55	扮り姿を隠させるアタマス王の妻イノ	○●(隠く人1人)	○●
	XLIVr	m56	黄金の牡羊に乗って海を渡るプリクセスとヘレ	○△位置反転●(またがる)	○●
	XLIVr	m57	泳いでヘロの塔に向かうレアンドロス	○	○
	XLIIIc	m58	ユノと黄金の三人の女神	○△	○△
	XLIIIv	m59	妻イノから子を奪う狂気のアタマス	○●(位置反転)	○●
	XLVv		目次がない見出し5小		
	XLVIc	m60	虹(イリス)	○位置反転	○
	XLVIv	m61	蛇になったカドモスと妻ハルモニア	○△	○△
	XLVIv	m62	塔に閉じ込められたダナエと交わるユピテル	○△	○△
	XLVIv	m63	クライエ(三人娘)の目を盗むベルセウス	○△●(登場人物)	○△●
	XLVIIIc	m64	怪物と戦うペレロゴン	○△	○△
	XLVIIIv	m65	アトラスの黄金の星冠を守る竜ラドンと戦うベルセウス	○△位置反転	○△
g	XLIXc	m66	アンドロメダ、嘆く父王ケペウスと妻カシオペア、海獣と戦うベルセウス	○△●(種神)	○△●
73(49)-80	XLIXv		見出し5小		
	Lv	W22	第5巻扉絵 プロセルピナを連れ去るプルート	○	○
	LIVv	m67	ピネウスに毒をかざすベルセウス	x	○△
	LIIIc	m68	アクリシウス王の前でベルセウス	○△	○△
	LIIIv	m69	ムサたちに夢に案内されるミネルヴァ	○△室内	○△
	LIIIc	m70	ミネルヴァに物語をするムサたち	○△	○△屋外
	LVIc	m71	クビドの矢で撃たれるプルート、ウェヌス	○△	○△位置反転
	LVIc	m72	プロセルピナを連れ去るプルート	○△	W22に類似
	LVIv	m73	ケレスによってトカゲにされた少年、老妻	○△	○△
	LVIc	m74	プロセルピナの毒を発見するケレス	x	○△
	LVIv	m75	プルート、プロセルピナ、ケレス、ユピテル、アスカラゴス	x	x
h	LVIIc	m76	セイレンたち	○△	○△
81(57)-88	LVIIv	m77	ディアナによる高雷で河神アルペイオスから隠れるアレトウサ	x●(ディアナとアレトウサ)	x●
	LVIIv	m78	トリプトレモスに怪物の種を託せた電車を与えるケレス	○△●(車に乗る)	○△●
	LIXv	W23	第6巻扉絵 ミネルヴァによってクモにされたアラクネ(後書)アラクネと老妻に姿を変えたミネルヴァ	○	○
	LIXr	m79	首を用いるアラクネにヘカテの尿の汁をかけるミネルヴァ	○	○△
	LIXv	m80	アポロの矢に射られるニオベの身子たち、	○△	○△
	LXIIIc		図欠 見出し欠(ゴードリアン本には有)	x●(女神ラトナとその息子、男2人)	x●(女神→祭壇)
	LXIIIc	m81	アポロンと姿をはがれるマルシユアス	○位置反転	○△
	LXIIIv	m82	息子ペロアスの肉を神々に供するタンタロス	○△	○△
i	LXVIc	m83	船出するテレウスを見送る妻プロクネ	x●(結婚の因)	x●
89(55)-96					

	LXVv.	m84	ピロメラとテレウス	国文 見出し	国文 見出し文
	LXVv.	m85	ピロメラをテレウスに託す父王パンディオン	○△	○
	LXVv.	m86	ピロメラの首を切るテレウス	×●(位置反転)	○△●
	LXVIIv.	m87	ピロメラを見出すプロクネ	○△●(挿物見せる)	○△●
	LXVIIv.	m88	息子イテュスを殺し、妹ピロメラとともに料理するプロクネ	×	×
	LXVIIIv.	m89	テレウスにイテュスを供するプロクネとピロメラ	○△	フォリオ文
	LXVIIIv.	m90	オイテュリアを連れ去る北風ボレアス	○(位置反転)	フォリオ文
	LXIXv.	w24	第7巻扉絵 火を喰く牛を魔法の薬草でなだめるイアソン	○	フォリオ文
	LXXv.	m91	ハルピュイアに食物を奪われるペネウス	○△●(王中央)	○△●
	LXXv.	m92	イアソンの船を盗るメデアとアイエテス王	×	○△
	LXXv.	m93	火を喰く牛を魔法の薬草でなだめるイアソン、黄金の羊毛皮を守る電	×●(牙から兵士)	×●
	LXXv.	m94	乗船するイアソン、別の船にメデア	×	○△
	LXXIIIv.	m95	イアソンとメデア	×	国文 見出し
k 97(73)-104	LXXIIIv.	m96	メデアと電車	○●(位置反転)	○●
	LXXIIIv.	m97	メデアに騙され父ペリアスに刺す娘たち	○△	○△
	LXXIIIv.	m98	2人のわが子を残すメデア	×	×
	LXXVv.	m99	地獄への洞窟の入り口で二つ頭の怪物と戦うテセウス	○	○
	LXXVv.	m100	地獄から戻るテセウスとその仲間	○位置反転	×
	LXXVIv.	m101	妻メデアの企みで、息子テセウスに毒酒を飲ませようとするアイゲウス王	×	国文 見出し
	LXXVIv.	m102	夢見るアイアコス王、櫻の本と橋の民ミネルムン	○位置反転	×
	LXXVIIIv.	m103	安眠したケパロスと妻プロクリス	×	×
	LXXVIIIv.	m104	妻の死をまごころに物語るケパロス、眠る王	○△番外	○
	LXXXv.	m105	ユニコーン(山キツネ)を盗う犬	×	○△
	LXXXv.	W25	第8巻扉絵 ミノス王に父王ニロスの頭を捧げるスキュラ (後巻)父の首を切るスキュラ	○	○
i 105(101)-112	LXXXIv.	m106	ミノス王の船にすがりつくスキュラ	○位置反転	○
	LXXXIIIv.	m107	パンパエと牝牛	○	○
	LXXXIIIv.	m108	パンパエ、ダイダロス、木の牝牛	×	○
	LXXXIIIv.	m109	アリアドネの助けで羊人半獣ミノタウルスを倒すテセウス	○△	○△
	LXXXIVv.	m110	空を飛ぶダイダロスと息子イカロス	×●(海中にイカロス)	×●
	LXXXVv.	m111	ダイダロスにより城壁から落とされるペルディウスを救うミネルムン	○	○
	LXXXVIv.	m112	カリュドン野の野イノシシと戦うテセウスと仲間たち	○△	国文 見出し
	LXXXVIIv.	m113	息子メレアグロスの運命の首を砕くへくるアルタイア	×	×
	LXXXVIIv.	m114	メレアグロスの死	○△●(首をくへるアルタイア)	×●
	LXXXVIIv.		国文 見出し5小		
m 113(89)-120	LXXXIXv.	m115	ユピテルとメルクリウスを敬拝する老婆パキウスと夫ピレモン	○	○
	XCv.	m116	ケレスの櫻の本を伐り倒そうとするエリュシクトン	○△	○△
	XCIIIv.	W26	第9巻扉絵 雄牛になった河神アクロオスの角を折るヘラクレス (後巻)ディアネイラ、父王イネウス、妻アルタイア	○	○
	XCIIIv.	m117	妻ディアネイラを誘拐する羊半人ネッスを弓で射るヘラクレス	○	○位置反転
	XCIVv.	m118	ディアネイラと赤を結く男(?)	×	○△
	XCIVv.	m119	ディアネイラと従者リカスと赤を結く男	○△●(赤を結す)	○△●
n 121(97)-128	XCVIv.		見出し5小		
	XCVIv.		目次がない見出し5小		
	XCVIIIv.	m120	リカスを殺すヘラクレス	×	×
	XCVIIIv.	m121	ユピテルの前のヘラクレス	×	国文 見出し手書き
	XCIXv.	m122	イオレに物語るアルクメネ	○	○
	XCIXv.	m123	お産の女神に地をつくカウシティア	×	×
	Cv.	m124	赫ドリュオへのことを語るイオレ	×	×
	Cv.	m125	ギリュネイクスとテュデウスの戦い	○△	○△
	Civ.	m126	入浴するイオカスタとオイディプス	○●(イオカスタ髪でまつ)	○●
	Civ.	m127	テーバイ攻め	○△	国文 見出し
	Civ.	m128	アテネ王テセウスがテーバイを破壊するのを助けるアルゴスの女たち	○△	○△
	Civ.	m129	邪文を喰くビュプリス、手紙を受け取る兄カウニス	×	国文 見出し
	Civ.		目次がない見出し		
	CIIIv.	m130	倒れたビュプリスの涙が泉となる	×	○
o 129(105)-136	CVv.	m131	女神イシスに祈りを捧げるテレトゥサと妹イビス	○位置反転	×
	CVIv.	W27	第10巻扉絵 壺等をひくオルペウス、ケルベロスが守る冥界にいる エウリュディケ (後巻)電(龍)を踏むエウリュディケ	○	○
	CVIIIv.	m132	アリストエウスから逃れて蛇を踏むエウリュディケ	○位置反転	○
	CIXv.	m133	壺を盗るキュッパリッソスと天上のアポロン	○位置反転	×
	CXv.	m134	倒れたヒュアキントゥスを介抱するアポロン	○△位置反転	○△
	CXv.	m135	女神キュベレと去勢されるアテイス	○△	○△
	CXIv.	m136	ウェヌスの怒りにより牛に変えられたケラスタと売春婦になった ゾロエティデス	○△	○△
	CXIv.	m137	ビュマリオンと生きた女性になった象牙の像	○△●(像様たえる)	○△●
	CXIIv.	m138	ミュウの良殿を止める乳母	○	×
p 137(113)-144	CXVv.	m139	本から生まれたアドニス	○△	○
	CXVIv.	m140	ヒッポメネスとの競走、黄金のリンゴを盗うアトランタ	○東内	○△
	CXIXv.	W28	第11巻扉絵 エウリュディケと再会するオルペウス (中巻)トラキアの女たちが投げた石で死ぬオルペウス、電(龍) (後巻)ヘブロス河に浮かぶ壺等	○	○
	CXXv.	m141	食べ物が黄金に変わるミダス王	○△	○
	CXXv.	m142	アポロンとパンの歌合戦の審判のために驢馬の耳になったミダス王	○位置反転	○△

q 145(121-152)	CXXIv	m143	人間に姿をかえたアポロンとネプトゥスガライオモン王のトロイア領域を助ける	○位置反転	○△
	CXXIIv	m144	ペレウスの胸の中で獣に変身するテティス	x	x
	CXXIIIv	m145	兄の姿にもどり、ペレウスを受け入れるテティス	○△	○△
	CXXIIIv	m146	ユピテルの前のアテナ、ユノ、ウェヌス、メルクリウス	○	○
	CXXIIIv	m147	パリシに審判をゆだねることを三女神に語るユピテル	○△	図文 見出し
	CXXIIIv	m148	パリシにリンゴを渡すメルクリウス、ユノの提案	○△●(室内)	○△●
	CXXVv	m149	ミネルヴァの提案	○△室内	○
	CXXVv	m150	ウェヌスの提案	○△	○
	CXXVIv	m151	ウェヌスを選ぶパリシ	○△	○
	CXXVIIv	m152	ケユクス王を助けるペレウス	○△室内	図文 見出し
CXXVIIv	m153	キオネ、アポロン、メルクリウス	○△	x	
CXXVIIIv	m154	神によって胎が殺されたことをペレウスに告げる家畜養アマトル	x	x	
CXXVIIIv	m155	嘆息するアルキュオネと船出するケユクス王	x	○△	
r 153(129-160)	CXXIXv	m156	虹の女神イリスを頼りの神に送るユノ	○△	○△
	CXXXv		目次にない見出し5小		
	CXXXv	m157	甞るアルキュオネに美ケユクス王の夢で現れるモルペウス	図文 見出し	○
	CXXXv		見出し5小		
	CXXXv		図文 見出し		
	CXXXv	m158	死んだヘスペリエ、身を投げたアイサコスがテティスに助けられ鳥になる	○位置反転	○△
	CXXXIIIv	W29	第12巻扉絵 ヘレナの誘拐 (中巻)パリシとメラネウス王とヘレナ (後巻)舟	○	○
	CXXXIIIv		見出し5小		
	CXXXIIIv		見出し5小		
	CXXXIIIv		見出し5小		
CXXXVIv	m159	離船船(カストルとポルックス)	○	○	
CXXXVIv		見出し5小			
CXXXVIv	m160	息子アキレウスを乙女として贈るテティス	○位置反転	○△	
CXXXVIv	m161	オデュッセウス、武器を選ぶアキレウス	○△	○△	
CXXXVIv		見出し5小			
s 161(137-168)	CXXXVIIv	m162	父アガメムノンによって犠牲に捧げられるイピゲニアを助けるディアナ	○△位置反転	○△屋外
	CXXXVIIv	m163	トロイア軍に討死するギリシア軍の船	○△	○
	CXXXIXv		見出し5小		
	CXXXIXv	m164	ラビタイ族とケンタウロスたちの戦い	○△	○△屋外
	CXLIv	m165	アガメムノンと対立するアキレウス	x	○△
	CXLIv	m166	パトロクロスの死	○△	図文 見出し
	CXLIv		見出し5小		
	CXLIv	m167	戦場に居るアキレウスの軍	○△	○△
	CXLIv	m168	アキレウスとヘクトルの一騎打ち	○△	○△
	t 163(145-174)	CXLVv	m169	トロイアの崩壊を引きまわされるヘクトルの遺骸	○△
CXLVv		m170	ヘクトルの遺骸の運送	○△	図文 見出し
CXLVv		m171	アキレウスのボリュクセネへの求愛	○△	○△
CXLVv		m172	トロイア人と戦うアキレウス	○△	○
CXLVv		m173	アポロン神前でアキレウスを射るパリシ	○△	図文 見出し
CXLVIIIv		m174	アキレウスの武器について論争するギリシア人たち	○△	○
CXLVIIIv			目次にない見出し5小		
CXLVIIIv			目次にない見出し5小		
CXLVIIIv			目次にない見出し5小		
CXLIXv		W30	第13巻扉絵 アキレウスの武器についての論争で敗北し自殺するアイアス	○	○
CXLIXv		目次にない見出し5小コラム			
CLv	m175	アキレウスの武器についてのオデュッセウスとアイアスの論争	○△●(屋外)	○●	
CLv		見出し5中			
v 175(153-180)	CLIIIv	m176	アキレウスの武器が与えられたオデュッセウスと自殺するアイアス	○△屋外	○
	CLIIIv	m177	トロイアの陥落	○△	○△
	CLIIIv	m178	ブリアボスとヘカベの息子ボリュドムスの遺体を海に投げるトラキア王ボリュメストル	○△	○△
	CLIIIv	m179	ギリシア人たちの前に現れるアキレウスの軍	○△	x
	CLVv	m180	妹ボリュクセネの死を悲しむ王妃ヘカベ	○△●(屋外)	○△●
	CLVv	m181	ボリュメストルを誑うヘカベとトロイアの女	○△	○△
	CLVIv	m182	ユピテルに息子メムノンの怒めを乞うアウロウ	○位置反転	図文 見出し
	CLVIv	m183	トロイア陥落後に船出するアイネイアス	○	x
	CLVIIIv	m184	アニオス王に接待されるアイネイアス、父アンキセス、息子アスカニオス	○位置反転	図文 見出し文
	CLVIIIv		見出し5中		
CLVIIIv	m185	スキュラに物語るガラテア	○△	○△	
CLIXv	m186	キュプロロスが投げた岩で死ぬアキスと海に逃げるガラテア	○△位置反転 ●(背後にガラテア)	○△●	
CLXv	m187	スキュラに愛を語るグラウコス	○	○	
x 181(161-188)	CLXIv	W31	第14巻扉絵 カルタゴに上陸するアイネイアスを接待する女王ディド	○	○
	CLXIIv	m188	アイネイアスを前に迎える女王ディド	○△●(ディド建物の前)	○●
	CLXIIIv	m189	狼が島を逃げ去るアイネイアスの船	○△	○
	CLXIIIv		図文 見出し文		図文 見出し文
	CLXIIIv	m190	クマエの巫女シビュラの導きで冥界の父の亡霊と会うアイネイアス	○△	○△
CLXIIIv	m191	マカレウスとアカイニメデスの再会	○	○△	

	CLXVv.	m192	アカイニメデスに物語るマカレウス	○	×
	CLXVIr.	m193	キルクの魔法で得になったオデュッセウスの仲間	○△	○△屋外
	CLXVIIr.	m194	狩をするピュクス王とキルク	○	○△
	CLXVIIr.	m195	ラティヌス王の娘ラウィニアを妻とするオデュッセウス	図文 見出し文	図文 見出し
3 187(188-194)	CLXXXv.	m196	トゥルヌスと戦うアイネイアス	○△	○△
	CLXXi.		見出し5小		
	CLXXv.	m197	老妻に妻を娶えて、ボモナの国に入るウェルトゥムヌス	○△位置反転	○△
	CLXXXv.	m198	ボモナにイピスとアナクサレテの話をする老妻の妻のウェルトゥムヌス	○位置反転	○△
	CLXXIIIv.	m199	ローマ建国を指揮するロムルス	○△位置反転	×
	CLXXIIIr.	m200	サビニの女の絶筆	○△	○
	CLXXIIIr.	m201	ロムルスの死を嘆く妻ヘルシリアにイリスを遣わすユノ	○△●(屋外)	○△●
2 195(195-200)	CLXXVr.	W32	第15巻断片 ミュスケイロスによる都市クロトンの建設	○	○
	CLXXVIr.	m202	ピュタゴラスの誕生	○△	×
	CLXXVIIv.	m203	弟子たちに教壇するピュタゴラス	○	○屋外
	CLXXVIIIv.	m204	不死鳥や他の動物の性質を語るピュタゴラス	○△室内	○△屋外
	CLXXIXv.	m205	ヌマと妻エゲイア	○位置反転	×
	CLXXXv.	m206	漁獲された魚子ヒッポリュトウスに海から社宇があらわれる	○△	○△
1 207(180-206)	CLXXXr.	m207	長者たちと、電(蛇)に乗るアスケレピオス	○△位置反転	×
	CLXXXr.	m208	捕殺されるカエサルとウェヌスに囚えられるその機	○△	○△
	CLXXXIIIv.	m209	ローマ、星となったカエサル(?)	×	×室内
	CLXXXIIIv.	m210	ローマの支配を祈願するオウィディウス	○位置反転	○
	CLXXXIIIv.	m211	書斎のオウィディウス	○△	○
CLXXXIIIr.		印刷者巻頭	同	同	